

赤松満政小考

——足利義教政権の一特質——

森*

茂

暁

【目次】

はじめに

一 赤松満政の登場と足利義持

(1) 刑部少輔

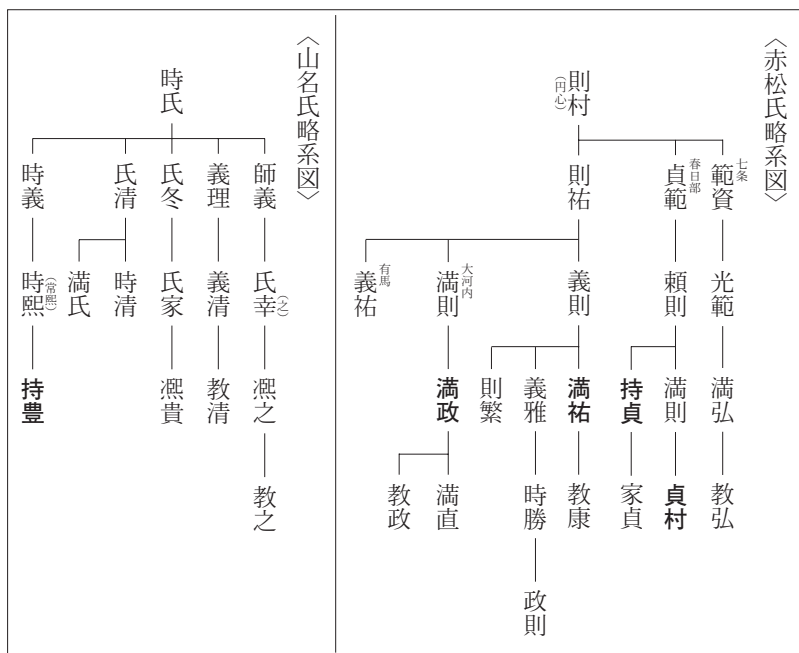
(2) 刑部大輔

二 足利義教期の赤松満政の動向

(1) 上総介

(2) 播磨守

- (3) 播磨国佐土余部代官
 (4) 兵庫代官
 (5) 將軍足利義教の近習・申次
 (6) 「赤松播磨(守)状」
 (7) 永享の山門騷擾
- 三 赤松満政の文芸活動
 (1) 連歌
 (2) 和歌
- 四 嘉吉の乱後の赤松満政
 (1) 赤松貞村のかかわり
 (2) 播磨守護職の争奪戦
 (3) 「三郡守護」赤松満政
 (4) 赤松満政の失脚
- おわりに



はじめに

日本中世の政治史を通観すると、播磨国出身の有力武将赤松氏が重要な関わりを有した大事件が少なからず見られる。具体的には、応永三四年（一四二七）十一月の赤松持貞の失脚事件、嘉吉元年（一四四一）六月の嘉吉の乱、嘉吉三年九月の禁闕の変、長祿元（二）年（一四五七）の長祿の変などである。しかもこれらの事件のそれぞれが、いずれも日本史の行方に決定的な影響を及ぼしたことから言えば、赤松氏は日本史を形づくった重要な家門の一つに数えてよいと思われる。

本稿の目的は、室町前期の幕府政治史の流れのなかに赤松氏の動向、特に赤松満政の動向をきちんと位置づけ、もって室町時代政治史の研究にとって中核的な問題である幕府―守護体制の性格を具体的に考えることであるが、赤松氏の動向を考察するためには、何よりもまずこの一族の特徴的な血縁的結合形態を念頭に置く必要がある。

赤松一族の族的結合の特徴をよく示している史料記事が、万里小路時房の日記『建内記』嘉吉元年（一四四一）六月二四日条の、嘉吉の乱を書き留めた記事のなかにみられる（時房、当時権大納言）。以下、関係部分のみ引用する。

【史料1】『建内記』嘉吉元年六月二十四日条^①

今夜赤松宿所^タの放火^自之後、又経程伊与守^{(赤松義雅)膳大夫}一条以北町以西宿所自放火、又左馬助^{(赤松則繁)同第}宿所自放火、其外彼一族被管人多以放火逐電云々、於伊豆^{(赤松貞村)入道}の播磨守者、雖一族無野心^{与惣領}別心之間、当參無相違、有馬是又近日不快之分歟、無相違云々、

將軍足利義教の殺害を果たした後、赤松氏の一门では赤松満祐のほか弟の赤松義雅や赤松則繁がそれぞれ自らの宿所に火をかけ、「一族被管人」も多く放火逐電した様子を生々しく伝えているが、赤松氏の族的結合の特徴を考えるとき、右の記事で特に注目されるのは、「於伊豆^{入道}の(赤松貞村)・播磨守(赤松満政)者、雖一族無野心^{与惣領}別心」という個所である。そこには惣領赤松満祐に対して、赤松貞村・赤松満政といった有力庶家が「別心」、つまり独立的なスタンスにあったと記されている。こうした有力庶家の惣領家に対する自立的傾向が赤松氏の族的展開にとっての原動力となっており、またそれは赤松氏と室町幕府政治との関係を考える場合の重要な手がかりとなることは疑いない。

では赤松庶家に何故そのような性格が生まれたか、その理由を考える時、赤松有力庶家と室町將軍家との間に形成された強固な、個別的で直接的な主従関係があるように思われる。赤松氏と將軍との軍功を介した強い結び付きは父祖赤松円心(則村)のころからみられるが、その子孫の代でも同様であった。たとえば、赤松満政が属する赤松大河内家の系統でいうと、満政の父満則(円心の孫)は「内野合戦(明徳の乱のこと)ニ討死」して足利將軍家に軍忠を

尽したし、また赤松貞村が属する赤松春日部家の系統でいうと、貞村の曾祖父貞範（円心の子）は建武二年（一三三五）一二月の「竹下ノ合戦ニ貞範、比類ナキ忠戦ナレバ、建武二年十二月十二日貞範ニ播磨国并丹波国ノ内春日部ノ庄ヲ下シ賜フ御教書ヲ給ケリ」とみえ、赤松春日部家と足利將軍家との間に御恩―奉公の關係に支えられた強固な主従關係が形成されたとみられる。赤松春日部家ではすでに赤松持貞が足利義持の近習として惣領赤松満祐に挑戦して敗れた先行ケースがある。こうした家の伝統は家門の榮譽として代々受け継がれ、家門の独自性・独立性を保持するうえで役だったであろう。折りあらば惣領家にとって代わろうとする上昇志向が有力庶家に芽生えたであろうことはむしろ自然というべきである。

本稿では、こうした赤松家の族的結合の特徴に留意しつつ、とくに庶家出身の赤松満政の動向をとおして、室町時代政治史における赤松氏の役割を考えてみたい。この分野における赤松満政の役割についてのまとまった研究はこれまで皆無に近く、近年になって竹内智宏「室町幕府と赤松氏——申次赤松満政の活動を中心として——」（『年報赤松氏研究』創刊号、二〇〇八年三月）が出た。

一 赤松満政の登場と足利義持

赤松大河内家の出身である満政が史料上に初めて登場するのは、足利義持の將軍在職期である。どのようにして義

持に接近したかについては明らかでないが、一門の赤松持貞がそうであったように、將軍足利義持の身辺警護にあたる近臣の一人として用いられたと考えられる。むろん赤松氏と將軍家との間に取り結ばれた主従関係の伝統を踏まえるかたちでの任用であったろう。ここでは、満政の足利義持との関係を満政の官途ごとに時期区分して、具体的に追跡してみよう。

(1) 刑部少輔

赤松満政は、信頼のおける残存史料によるかぎり、まず最初に「刑部少輔」の官途で登場する^⑥。足利義満・義持・義量三代にわたる室町幕府の記録「花宮三代記」の応永二十九年（一四三二）九月一八日条によると、足利義持の伊勢参宮の路次に随従した畠山・細川・赤松などの一門たちから構成される「十徳」の一人として「赤松大河内刑部少輔満政」とみえる。この個所が赤松満政の史料上の初見である^⑦。同様の記事は、同じ「花宮三代記」応永三〇年（一四三三）十一月一九日条にもみえ、ここにも「赤松大河内刑部少輔満政」が「十徳」の一人として顔をみせている^⑧。なお、この二年続き二度の足利義持の伊勢参宮に、同門春日部家の赤松持貞が「十徳」として赤松満政とともに随従している点は赤松一門の動向を考えるうえで注意してよい。要するに、赤松満政は足利義教の登場以前から、將軍足利義持が遠出する場合に供奉を務めるといった形で義持に仕え（この段階から「近習」の名で呼んでよいかは要検討）、官途は「刑部少輔」を名乗っていた。

(2) 刑部大輔

次に赤松満政の官途として登場するのは「刑部大輔」である。「安養寺文書」応永三二年（一四二五）三月二日赤松満政寄進状⁽¹³⁾は、赤松満政が備前国新田庄日笠田土村内安養寺々畠二町内（伍段 山王五節供料、壹町五段 八講供料）の土地を安養寺に対して寄進するという内容のものであるが、差出書きは「刑部大輔源満政」となっている。この史料によって、赤松満政が応永三〇年一月から同三二年三月の間に、「刑部少輔」から「刑部大輔」に転任したことが知られる。この時期は足利義量が応永三〇年三月に父足利義持から將軍職を譲られてより同三二年二月に早世するまでの在職期間とほぼ重なっているが、この間の義量をめぐる政治的事情と赤松満政の官位昇進とが関連するかどうか明らかではない。義量への將軍職譲渡後、「室町殿」としてなお権力を保持した足利義持が没するのは応永三五年正月であるから、赤松満政が足利義持期において到達した官位は「刑部大輔」であるということになる。

以上を要するに、現存史料によってみる限り、赤松満政が足利義持に仕え始めたのは応永三〇年前後からということができる。満政の官途はやがて「刑部少輔」から「刑部大輔」へと上昇するが、この時期の満政の具体的動向は以上述べたこと以外知られない。足利義持晩年の応永三四年一月には同門の赤松持貞を巻き込んだ大事件が生起するが、この事件に赤松満政がどのように関わったかも不明である。

二 足利義教期の赤松満政の動向

赤松満政にとって政治的進出への大きな契機になったのは、赤松一門の惣領義則の死去（応永三四年へ一四二七）九月二日）とこれに連動した赤松持貞の切腹事件（同年十一月三日）、さらにこれに続く「室町殿」足利義持の死去（応永三五年へ一四二八）正月一八日）、クジ引きによる新しい「室町殿」足利義教の登場（クジ引きによる後嗣決定は同日。還俗は同年三月一二日、元服は正長二年へ一四二九）三月九日）であったことはまず疑いない。出自する赤松一門内の力関係の変動と、室町幕府体制内における各種勢力の主導権をめぐる争いとが結びあって、主として京都首都圏の政治・社会状況がこれまで以上に不安定かつ流動的になったことが一連の事件発生の背景をなしている。將軍独裁体制の樹立をめざした足利義教の登場が赤松満政にとって野望への大きな転機となったこともまた疑いない。以下、足利義教と赤松満政との関係をいくつかの面で探ってみよう。

（１）上総介

足利義教の治世に入ると、赤松満政は「上総介」の官途でまず登場する。足利義持期の「刑部大輔」から「上総介」に転じた時点はいつか明瞭ではない。「広峯文書」正長二年（一四二九）三月九日赤松満政下地寄進状案は、赤松満政が「播磨国佐土郷内式百石下地」を「所願成就・寿福増長・子孫繁昌祈禱」のために播磨国広峯社に寄進する

という内容の文書であるが、この文書で赤松満政は「上総介源満政」と署名している。この文書が義教期における赤松満政文書の初見であり、この時点で、すでに満政は「上総介」の官途にあったことが知られる。注目すべきは文書の日付であって、その正長二年〈永享元〉三月九日とは足利義教が元服したその日なのである（義教は元服の直後の三月一日には將軍宣下、任参議・左中將、義宣の名を義教と改む）。このことを考慮すると、広峯社への下地寄進は足利義教元服の当日に意図的にセットした可能性が高く、願意たる「所願成就」の中味は主人たる足利義教と共有されていたことも十分に考えられる。

さらにこの推測を支えるかのように、赤松満政は足利義教の晴れの行事に参加した形跡がある。元服を済ませた足利義教は、永享元年八月四日に右大將に叙任されるが、翌永享二年七月二五日には右大將拝賀の儀式が公武社会からの多くの人々の参加のもとに大々的に挙行された。⁽¹⁶⁾その儀式の「供奉行列」の次第を子細にみると、侍所（時の頭人は赤松満祐）や小侍所（同様に畠山持永）など幕府関係の騎馬武者や多くの参仕の殿上人たちのなかの一角、赤松・伊勢・佐々木一門など総員二四名から編成された「御拝賀帯刀」グループのなかに「赤松上総介」（満政）がいるのに気づく。⁽¹⁷⁾「帯刀」（たちはき）とは「鎌倉・室町時代、將軍の参内・社参など晴れの時に、太刀を帯びて供をした役」⁽¹⁸⁾のことであるが、ここには赤松満政と足利義教との強固な個別身分的な結びつきを認めることができる。「上総介」の官途は、満政と義教との関係の深まりに伴い、義教の力ぞえによって与えられたのであろう。ちなみに「上総介」の官途は、満政の祖父で惣領の義則が嘉慶・応永年間にかけて実際使用したものである。⁽¹⁹⁾憶測すると、父祖義則が名

乗ったことのある「上総介」の官途を満政に与えた義教の心の片角には、満政流に赤松氏惣領の地位を移行させようという目論見が芽生えていたのかもしれない。

赤松満政の動向をよく伝える『満済准后日記』では、満政の初登場は永享二年正月一九日条（この日、室町殿新造御会所で「満政」〈但しこの個所では官途記載はなし〉を含めた僧俗・遁世者総員二一名の「参会人々」を集めて「御代初度」の連歌会を举行）においてであるが、満政が「上総介」の官途で登場する最後は永享三年正月一九日条⁽²¹⁾である。この間、満政は「満政」「赤松」大河内「赤松」上総介（満政）の表記で頻出し、義教の身边で活動していることがわかる。

（2）播磨守

さてその赤松満政は、永享三年（一四三一）二月一二日にはすでに新しい官途「播磨守」を名乗っている⁽²²⁾。つまり満政の「上総介」から「播磨守」への転任は、時期的には、永享三年正月一九日〜同年二月一二日の間ということになる。考えるべきは、満政の転任の理由と契機である。この時期の政治史面での背景的事情としては、足利義教の政治姿勢の転回がある。具体的には將軍への権力集中を意図した人事であり、永享二年正月の近習大館満信の政界からの失脚（大館満信は正長二年以降、將軍足利義教の権臣）はその一環とみなされている⁽²³⁾。おそらく足利義教は、自らの政治構想を実現するための一階梯として、近習大館満信に替えて赤松満政を選び出した。その具体的表現として

「播磨守」任命となったものとみたい。

ただ、赤松満政が「上総介」より「播磨守」に転任するのは大館満信失脚の約一年後であるので、両者の間には少し時間的懸隔があるが、将軍義教のそうした政治志向の高まりのなかでみれば、理解できないことではない。むしろ注意すべきは、赤松惣領家の満祐が応永三四年（一四二七）に父義則から譲り受けた父祖以来の「播磨守護」のポストに対抗するようになかった点で、庶家赤松満政の「播磨守」ポストへの任命であることである。そこに足利義教の満政への政治的なメッセージを読み取ることは不可能ではなからう。

もうひとつあわせ考えるべきは、文芸面からの理由づけである。満政が『満濟准后日記』に登場する最初は先述のように永享二年正月一九日条であるが、満政はこの初登場の当初から連歌好きの足利義教によって最厩にされていた模様で、これより「上総介」として登場する最後の永享三年正月一九日条までの丸一年間に開催された四回の室町殿連歌会と一回の室町殿和歌会に参加している。⁽²⁴⁾ こうした文芸の会への参加メンバーは、たとえば永享二年正月一九日に集められた総勢二人の「参会人数」は「兼内々被仰定了」と表記されているように、会の主催者「室町殿」足利義教によってかねてより内々に厳選された面々と考えられ、「室町殿」と参加メンバーとの間には文芸好尚を介した緊密な人間関係がとり結ばれていたものと思われる。

つまり、赤松満政の「播磨守」への転任は、足利義教の満政に対する政治的メッセージをこめた文芸好尚がらみの政治的措置とみたい。満政の官途はこのあとずっと変わることなく、文安二年（一四四五）四月山名氏に敗れて播磨

で敗死するまで継続する。

最後に付言したいのは、赤松満政が「播磨守」時代にも「帶刀」をとめている事実である。先に本項「(1)上総介」の個所で、赤松満政が上総介の官途にあった時期、永享二年七月の足利義教の右大将拝賀の儀式で満政が「帶刀」の役目をつとめたことを述べたが、しばらくの間断ののち、永享九・一〇年になって再び「帶刀」として登場している。「室町殿行幸記」⁽²⁶⁾によると、永享九年一〇月二二日、後花園天皇が足利義教の邸宅「花の御所」を訪問したとき、内裏から「花の御所」への同天皇の移動にさいして「行幸御供奉帶刀十五番」に編成された全三〇名のなかに他の赤松一門、土岐一門、佐々木一門に混じって、「赤松播磨守満政」の名が認められる。さらに「石清水放生会記」⁽²⁷⁾によると、永享一〇年八月一五日の「公方様(足利義教)御下向八幡」のとき、全一〇番に編成された「帶刀」のなかに同門他門に混じって「赤松播磨守満政」が名を連ねている。⁽²⁸⁾

(3) 播磨国佐土余部代官

赤松満政は、播磨国佐土余部の代官職をつとめている。佐土余部は平安時代成立の『和名類聚抄』にみる播磨国印南郡佐突(さつち)・余戸(あまりべ)郷の郷名を継承する地名で、室町期には伏見宮家が本家職を持つ国衙別納の所領であったとされている。⁽²⁹⁾このため伏見宮貞成親王の日記『看聞日記』に佐土余部は散見するところとなり、ちよ

うど貞成の時期に赤松満政がこの所領の代官職をつとめていた。以下のような所見がある。

【史料2】『看聞日記』永享四年正月六日条

六日、隆富朝臣御恩佐土余部去年未進、赤松大河内(滿政)今日究済、仍朝臣献賀酒、件地代官内大河無沙汰之間、召放之、処歎申問、為御料所如元補代官、仍慇懃致沙汰也、

【史料3】『看聞日記』永享四年八月二六日条

廿六日、(前略)抑赤松大河内公方御共申播州へ下向、於彼所死去云々、自兼病氣、然而押而罷下死云々、佐

土余部代官也、不便々々、遺跡不可相替歟、但実説不審、〔後問〕大河内死事無其義、倒産説不可説々々、病餘へ勿論也。〕

【史料4】『看聞日記』嘉吉元年四月一〇、一一日条

十日、(中略)、抑播州佐土余部代官内大河無沙汰事、三条へ以状申、重賢為使公方伺申、御左右可申之由被申、

先珍重也、(下略)

十一日、(中略)、大河内進使者、佐土赤松(佐土余部のこと)事、無沙汰恐入、近日可致沙汰之由申、(下略)

右の史料によって、佐土余部をめぐる代官赤松滿政と本家伏見宮家との関係が垣間見える。【史料2】によって、

佐土余部は伏見宮家の家臣四条隆富の給地となっていたが、代官の赤松滿政は年貢の進済を滞らせ、ために伏見宮家から代官職を改替するぞとおどされて究済していることが知られ、【史料3】は代官赤松滿政の播州での死亡説を伝えている。また【史料4】によって、また代官赤松滿政が無沙汰したので、伏見宮家は公方足利義教に訴えた。義教の注意をうけたのであろうか、翌日滿政は陳謝のための使節を伏見宮家に遣わし、近日中の対応を約束していること

が知られる。

以上によって、伏見宮家によって播磨国佐土余部の代官に任命されていた赤松満政は、代官職の改替をちらつかせたり、公方に訴えるというような強行手段をとらなければ、職務を十分に果たしていないことがわかり、伏見宮家にとっては決して忠実な家領経営の代官とは言えなかった模様である。

ちなみに佐土余部と同一か、もしくは極めて近い関係にある佐土郷については、「広峯文書」に収める正長二年三月九日赤松満政下地寄進状案によると、「(赤松)上総介源満政」が「播磨国佐土郷内式百石下地事」を広峯社に寄進している事実が知られる。この寄進状にみえる「佐土郷」と佐土余部との関係は検討の余地があるが、実体としてはほぼ同一のものと推測される。

(4) 兵庫代官

『満済准后日記』永享六年二月二五日条に以下のような記事がある。^③

【史料5】『満済准后日記』永享六年二月二五日条

廿五日、(中略)、兵庫事、可被仰付赤松播磨守^(満政)、但猶可相尋管領之由被仰出、其子細^(細川持之)ハ唐船粮米并公方様渡御煩以下事ハ、為洛中土藏約^(役力)、可致其沙汰之儀無子細云々、但諸土藏者共同不置代官於兵庫者、只今沙汰之儀、

定後々無足怖畏可相殘歟、然者尤不便ニ思食也、如何云々、

この個所は、以下二つのことをうかがううえで重要なヒントを提供している。一つは、「唐船糧米」（遣明船乗員用の食糧米か）と「公方様渡御煩」（公方の渡御にともなう雑費か）を洛中土蔵が役儀として負担していることから推して、業務上唐物（中国からの舶来品）を扱う洛中土蔵は、唐物の荷揚げの場としての貿易港兵庫を営業上共同利用する特権を持っていたのではないかということ、もう一つは、足利義教は赤松満政を媒介にして、兵庫を直接支配しようと考えたのではないかということ。高坂好氏はこの満政のポストを「兵庫代官」と表現しているが、⁽³⁸⁾ 妥当な見解である。高坂氏の指摘のように、兵庫は鎌倉期以来東大寺領であったから、義教が代官を置くということは兵庫を東大寺から召し上げ御料所とすることを意味している。同氏の指摘どおり、対明貿易のために重要になったからである。義教が兵庫にこのようなものを新たに置けば、洛中の諸土蔵は反発して「土蔵役」を負担してくれなくなり、その結果「無足怖畏」（収入がなくなるおそれ）が生じ、「不便」の事態が起こりかねない。だから足利義教は管領細川持之にそのへんのところをよく尋ねるよう満政に指示しているのである。

こうした義教の兵庫をめぐる貿易管理の政策がその後どのように展開したか明瞭ではないが、右の記事には、義教の貿易直接統制への積極的志向と、これに対する洛中土蔵のリアクションを懸念する義教の繊細な思慮とが交差している。ちなみに、『満濟准后日記』によると、永享六年五月来朝した唐使「官人方へ「五色」百籠・楯十荷」を差し入

れるために「赤松播磨守（満政）」が「伺申入」、つまり当局にお伺いを立てている所見があるが、あるいはこの行為は当時の満政の兵庫代官としての職務と関係するかもしれない。

（5）将軍足利義教の近習・申次

赤松満政の室町幕府における基幹的な職務は「近習」であった。「近習」は将軍足利義教の信任を得て側近くに仕えるので、将軍に対して物事を伝えたり、逆に将軍の命令・指示を他者に伝達する仕事を行った。いわば将軍と他者との中継ぎ役である。こうした行為を当時の史料では「申次（もうしつぎ）」といった。その意味で「近習」と「申次」とは実質的には一体と考えてよい。なお、この場合の「申次」は、どちらかと言うと特定の役職名というより、そうした行為をさす普通名詞としての意味が強いように思われる。³⁴⁾

近習赤松満政が足利義教の使者として出向きその仰せを取り次ぐという記事は、満政の活動が活発かつ広範囲であっただけに諸史料に多々みられるが、初めて赤松満政の申次行為を本格的に追跡した竹内智宏氏は、その史料の初見を永享二年正月、その終見を嘉吉元年六月とする。³⁵⁾ 同氏が一覧表に整理したように満政の申次としての所見は多岐にわたるが、満政の職務内容を大まかに分類すると以下のようなようになる。³⁶⁾

①足利義教の命令・意思の伝達

②足利義教への上申・披露の中継ぎ

③ 足利義教のための祈禱卷数の請取

④ 足利義教の指示による行動

⑤ その他

右のそれぞれについて当時の記録にみえる典型的な具体事例をあげつつ解説したい。まず①②は近習・申次の仕事内容として最も基本的なもので、それだけに実例は枚挙に遑ない。①ではたとえば、足利義教が「九州事」^{③)}や「駿河事」^{④)}など喫緊の政治・軍事的問題について幕府政治顧問としての満済の意見を求めようと招きたいときなど、赤松満政は満済にその旨を知らせるなどして連絡調整にあたっている。この手の実例は非常に多く、義教がいかに満済をこゝうした面で頼っていたかがうかがわれる。また②のケースでいうと、例えば満済が足利義教のご機嫌をうかがったり、九州探題の使節板倉が義教に面謁としたいというときには赤松満政をとおすというような場合もあるが、ほかに「一色馬打次第事」のような大名間のもめごとのさい満済に届けられた「山名状」(山名常照の見解)を満政を通して義教の上覧に備えるという実例もあるし、また鎌倉公方の使節二階堂盛秀が使節として上洛しても義教が会ってくれないという状況のなかで、京都に届けられた関東管領上杉憲実の書状が満政をもって上覧に備えられた^{⑤)}。加えて、『九条家歴世記録二』に収録される、荘園経営の円滑化の目的で満政にあてられた永享三―四年ころの九条家よりの書状群も義教への披露を要請しているから②に含めてよからう。

③では、義教の「御風氣御祈」の卷数を満済から満政に進めたり、聖護院満意が卷数を満政に「付遣」したりして

いる。⁽⁴⁶⁾ むろん義教のための祈禱巻数以外は満政の請け取るところではない。

④では、大和国の問題で筒井を上洛させることになったとき、義教は筒井の到着先の畠山満家の宿所に満政と幕府奉行人飯尾肥前守（為種）を派遣し、委細談合させているし、⁽⁴⁷⁾ 裏松義資の横死が義教の指示であるとの「不思議虚説」を流したとされる高倉永藤にその真偽を尋ねるために遣わされた「両使」の片方を満政がつとめている。⁽⁴⁸⁾ また義教より諸社に神馬が献納されることになったとき、満政が「諸社神馬奉行」をつとめたのも④に含めてよからう。さらに永享一一―一二年ころ満政が公方御倉の運営に重要な関わりを有していたことは別稿で述べた。⁽⁵⁰⁾

以上に加えて⑤は、それら以外のやや趣の異なるケースである。たとえば、『満済准后日記』に以下の記事が見られる。

【史料6】『満済准后日記』永享二年二月一日条⁽⁵¹⁾

十四日、晴、自大内入道方、筑前国御年貢二十万疋今日進之、以慶円法眼遣大河内方了、^(盛見)
^(満政)

幕府料国筑前国の代官大内盛見から永享二年分の年貢二十万疋が満済のもとに進められたので、満済は配下の慶円法眼（六条八幡宮小別当）をもって赤松満政方に遣わしてそのことを伝えたことが知られ、満政が職務上幕府の財政面に関与をしていたのではないかということはここからも窺える。

いまひとつ興味深い例を一二あげると、『満済准后日記』永享四年七月四日条に、摂政二条持基が自邸に足利義教の渡御を請うために自ら室町殿に隣接すると思われる「宝池院壇所」に出向いていたので、先例では使者が出向くものだと満済が尋ねると、摂政は「赤松播磨（満政）指南申故也」と答えたという記事がある^⑤。この記事は当時の室町殿足利義教と公家との位置関係を象徴するものといえるが、同時に室町殿の近習としての赤松満政の権勢をうかがい知ることができる。もうひとつ、それは赤松満政が足利義教文書の草案を書いていることである。『満済准后日記』永享四年八月二九日条によると、義教の「富士御下向事」について関東管領上杉安房守憲実が義教にあてた「内々申入状」つまり内々の書状に対する返事を、義教は赤松満政に案文を書かせ、その案文に満済が意見を付けたということが記されている^⑥。

（6）「赤松播磨（守）状」

『満済准后日記』には「赤松播磨（守）状」という表記で、赤松満政の発給文書を意味する言葉が六ヶ所に登場する^⑦。いずれも義教の意を受けて出されたものであるが、しかしそれがどのような形式の文書であったかは明確でない。他方、「大日本古文書」は少なくとも四通の赤松満政文書を収録している。具体的には以下のとおり。

①（嘉吉元年）卯月一五日赤松満政副状（『島津家文書』二七四号）

○島津陸奥守（忠国）あて○差出書は「播磨守満政」○足利義教、島津忠国ら五人の大覚寺義昭を討ちし功
赤松満政小考（森）

を褒す

②（嘉吉元年）四月一日赤松満政書状（『島津家文書一』二七五号）

○島津陸奥守（忠国）あて○差出書は「満政」○島津忠国の義昭を討つを褒し、「今度儀」をたしなめ、なお円宗院をとらえしむ

③（嘉吉元年）卯月一六日赤松満政書状（『島津家文書一』二七六号）

○島津（忠国）あて○差出書は「満政」○野辺告文のこと

④（嘉吉元年カ）六月一三日赤松満政書状（『上杉家文書一』一一三号）

○判門田あて○差出書は「満政」○上杉長棟子息一人越後に置くべきことを告げ、長棟の子息の人数・年齢を問う

このほかに『上杉家文書一』に収める（嘉吉元年カ）正月二〇日上杉長棟〈憲実〉書状（一一五号）に「就京都祇候之事、赤松播磨守（満政）証状下遣之候、簡要之証文候」とみえ、また同文書の（文安元年）九月二日上杉長棟〈憲実〉書状（一二〇号）に「可令致京都祇候之段、普広院殿（足利義教）御代令言上之処、上意無相違之旨、赤松播磨守書状在之」というくだりがあるのも参考になる。後者の「赤松播磨守書状」が「上意」つまり足利義教の意を受けた文書であったことは確実で、しかもそれは前者では「赤松播磨守証状」と呼ばれている。

右のことを踏まえて先の①～④の満政文書を考えると、形式は書状であっても実質は奉書であったと思われる、『満

『済准后日記』に登場する「赤松播磨（守）状」とは書状形式の奉書であったと考えられる。⁽⁹⁶⁾

(7) 永享の山門騷擾

永享五年七月閏七月には山門の嗽訴が起こり、三度にわたって要求事項を綴った山門牒状が京都幕府にもたらされた。具体的にいうと、①永享五年七月一九日に根本中堂で閉籠衆議されたもの⁽⁹⁷⁾、②永享五年閏七月七日に同じく衆議されたもの⁽⁹⁸⁾、③永享五年閏七月二〇日に大講堂三院宿老が集会して議したものである⁽⁹⁹⁾。このうち、『看聞日記』と『醍醐寺文書』に収録された①の、全一二ヶ条のなかで赤松満政を糾弾した箇条のみを以下に掲出する。

【史料7】『看聞日記』永享五年七月二四日条

一 当御代殊政化超于前々、撫民勝于代々、是併継絶興廢為御政道之处、赤松播磨守奉掠上聞、偏猷秀鼂肩之儀在之間、就每事不恐公方不憚外聞、就賄賂属詫恣令許容、奉為公方為不忠族之間、速可被処遠流事、

この一連の事件の①に関しては、『満済准后日記』永享五年七月二三日条にも記事があり、幕府側に対して山門が①をどのように提示したかが知られる。その意味でも貴重であるからこの記事を掲出する。

【史料8】『満濟准后日記』永享五年七月二三日条

廿三日、(中略)、丑初刻歟自管領書状到来、今日晩頭山門事書到来間写進、明日早々御出京可宜云々、事書条目

非殊題目也、猷秀(『看聞日記』等では「猷秀」院号並衆)奸曲条々、赤松播磨守・飯尾肥前守猛惡無道次第等書

載之了、於赤松播磨可被遠流、於飯尾肥前ハ渡賜衆徒手、可被其沙汰由申也、

これによってみると、①が幕府に届けられたのは七月二三日晩頭のことであることが知られ、赤松満政が山門から指弾されている理由についてみると、【史料7】では「奉掠上聞、偏猷秀最良之儀在之間、就毎事不恐公方不憚外聞、就賄賂属詫恣令許容、奉為公方為不忠族」であることで、罪刑は遠流、また【史料8】では、飯尾肥前守と一緒に「猛惡無道」の「奸曲」の咎で、満政は遠流、飯尾は山門衆徒に身柄引き渡しとなっている。

赤松満政は「近習」、飯田肥前守は「奉行」であったから、二人がともに幕府政治に直接にかかわる立場にいたことは疑いない。山門と彼らの間のトラブルが何によって引き起こされたか、そのトラブルの具体的内容はどうかなど肝心な部分が明瞭ではないが、飯尾肥前守が「土蔵」(公方御蔵か。金融業者)からの金銭の借り入れに職務上関わっていたこと^④、土蔵は「山徒」によって営まれたとする下坂守氏の研究をふまえると都市京都の経済活動をめぐる幕府と山徒との間の抗争、おおまかにいうと幕府と山門との経済面での利権争いに起因することは動くまい。

前述のように山門は三度にわたって牒状(事書)を出して幕府に厳しい対応を求めたが、結局のところ両者の間で

妥協が成立し、かたちだけの処分しかなされていない。『満済准后日記』永享五年閏七月一一、一二日条によると、⁽⁸⁸⁾
將軍足利義教自身が管領細川持之以下有力大名たちの意見を聞き入れず、「以諸大名申詞、予（満済）披露之処、光
聚院（猷秀）并播磨守（赤松満政）・飯尾肥前守（為種）等流罪等事、不得其意由再三被仰了」（一一日条）とあるよ
うに、張本人と目された三人の流罪に難色を示している。しかし、結局、猷秀は土佐国畑に流罪、飯尾為種は尾張国
へ流罪ということになったが、それはかたちだけの処分にすぎなかった。⁽⁸⁹⁾

当の赤松満政はどうかというと、前述の山門牒状①では「速可被処遠流」と、②では「永被放不反之遠島」とされ
ていたが、③になると「猷秀法師^并為種男可賜衆徒手」とあるのみで満政の罪刑についての言及がない。さらに『看
聞日記』永享五年閏七月二六日条に「赤松大河内（満政）事、可被預宗領（赤松満祐）云々」⁽⁹⁰⁾とある点から推測する
と、赤松満政の身柄は惣領満祐に預けられることになったものと察せられる。⁽⁹¹⁾しかし満政の処遇については幕府も特
別に配慮した形跡がある。『満済准后日記』永享五年八月四日条に以下のような記事がある。⁽⁹²⁾

【史料9】『満済准后日記』永享五年八月四日条

（細川持之）
四日、自管領使者参申、重山門事書案写進了、只同篇申状也、於赤松播磨守事者、管領頻申入間、重訴訟可略
之云々、坐禅以下山徒御免事堅申入計也、

このとき山門から示された「重山門事書」の案文が管領から満済に届けられた。その事書には、赤松満政については「重訴訟可略之」、つまり満政のことは提訴事項からはずすと記されていたのである。それは「管領頻申入間」とあるように、管領細川持之がしきりに山門と交渉した結果であった。さらに優免された「坐禅以下山徒」とは幕府によって指名手配されていた犯科人の山徒と考えられる。「坐禅」とは坐禅院のことで、「山門使節」の一人であった。要するに、幕府と山門は交渉を重ね、その結果赤松満政の罪を問わないかわりに、坐禅院以下を優免すること、交渉が妥結したのである。

したがって、満政はこの事件で失脚するというようなことはなく、以降の満政の行動は従来と比べて変化は認められない。満政は幕府によって救済されたのである。換言すれば、満政という人物にはそこまでしても幕府に残しておくべき存在価値があったのである。

三 赤松満政の文芸活動

足利義教政権の性格を論ずるときには文芸面での検討を避けておれない。それは義教が文芸を一種の政治的装置として活用したからである。その意味で義教政権の理解のためには文芸を政治的な文脈で読むことが必要となる。その文芸とは主として連歌と和歌である。『満済准后日記』をよむと、足利義教が主催する連歌会・和歌会の開催記事

が頻出する。個々の事例にそくし、特に参加したメンバー（「参会人々」などと表記）について注目すると、連歌会と和歌会双方に皆勤する者、あるいはどちらか片方に精勤する者などいくつかのパターンがあることに気づく。

具体的にいうと、連歌会・和歌会双方にある程度長期的・固定的に参加しているのは、公家では、二条持基（摂政・関白）・三条公保（按察大納言）・三条実雅（右中将・中納言。但し永享四年一月以降）、寺家では、満意（聖護院准后）・満濟（三宝院准后）・義運（実相院僧正）、さらに武家では、山名常熙（右衛門督入道）・赤松満祐（左京大夫入道）・赤松満政（上総介・播磨守）、一色持信（兵部少輔・左京大夫。但し永享四年三月まで）、赤松義雅（伊予守。但し永享四年一月以前）、細川持之（右京大夫。永享四年一〇月より管領。但し会衆としてみえるのは管領就任後）といったようなメンバー総計一二人程度である。この他に連歌会・和歌会いずれか片方にのみ固定的に参加するメンバーがいる。彼らについては以下の関係個所でふれることにして、ここでは、そうした側面に秘められた政治的意味などについて考えてみたい。連歌、和歌の順に検討を加えることとする。

（１）連歌

「場の文芸」としての連歌は、南北朝時代の延文元年（一三五六）に成立した『菟玖波集』が翌年後光厳天皇から勅撰に准ぜられることにより文芸としての市民権を獲得したと言ってよいが、室町時代に入ると社会的に一層の支持を獲得して、さらなる隆盛期をむかえることになり、あわせて多面的な性格を帯びてきた。足利義教期の連歌につい

ては、従来の研究史を踏まえて新見解を提示した三角範子「足利義教邸月次連歌会について」⁽⁸⁾という専論がある。同論文の結論部分を引用しよう。⁽⁹⁾

義教邸月次連歌会は義教の政権運営と密接に関係している。月次連歌会は義教期の幕政の比較的な安定の上に成り立ったというよりむしろ、政権運営のための一つの装置であったとみてよい。連歌会と政治の場が相互作用を持つところに、義政の主導する文芸の特質の一つがあるといえる。

足利義教主催の連歌会の構造と性格については右の三角論文に任せることにして、本稿の関心は赤松満政がこの連歌会でどのような役割を果たしたかである。会衆からみた開催の意味については三角論文にも言及があり、「義教邸月次連歌会に加わることは会衆にとって喜ばしいことであり、その場での成功によって名誉が得られる。上層社会でさらに認められる機会でもある」としている。⁽¹⁰⁾ 妥当な見解と思われるが、いますこし立ち入った詮索はできないであろうか。

足利義教の連歌会・和歌会の会衆の参加状況には、いくつかのパターンがあると前述した。いま特に連歌についてみると、双方に固定的に登場するメンバーは前述のとおりであるが、和歌会には参加せず、連歌会のみはその名を見せる者たちがいる。具体的にいうと、公家では一条兼良（左大臣・摂政。但し永享四年三月以降）、寺家では認めら

れず、また武家では石橋信乗（左衛門佐入道）、三上周通（近江入道。但し永享四年正月まで）、蛭川信水（周防入道。役目は執筆）、佐々木（京極）高数（加賀入道）、一色吉原入道、山名熙貴（中務大輔。但し永享四年正月まで）と細川基之（阿波入道。但し永享三年六月以降）、その他禅僧・時衆では重阿・玄阿・祖阿・承祐・瑞禅というぐあいである。むろん以上に挙げなかった者のなかには、これに準ずる参加回数（ケース）や、たとえば「非御連歌人数」の一人とされた畠山満家（法名道端、左衛門督、前管領。『満済准后日記』永享四年三月四日条）のようにもっと参加回数が少ないというケースもある。

連歌会の会衆構成の特徴の一つは、「禅僧瑞禅」については検討の余地を残すが、承祐（宗匠）、重阿・元阿・祖阿（時衆）といった「連歌の専門家」⁽¹⁾がほぼ常に加わっている点であり、この点では和歌会の場合の専門家飛鳥井雅世（題者・読師）・同雅永（講師）が常に加わっていることと対応している。

足利義教主催の連歌会は「政権運営のための一つの装置」とする先の三角氏の指摘のように、すぐれて政治性が高いと思われる節がある。例えば、斯波義淳の連歌会における立場と処遇である。斯波義淳は応永二年（一四一四）六月遁世し同二年八月に没した前管領・加賀前守護の斯波義重（義教）の嗣子で、当時「宿老」⁽²⁾と重んぜられた幕府重臣の一人であった。斯波義淳が連歌会に参加した所見は管見の限りみいだせず、おそらく義淳は連歌会のメンバーではなかったのではないかと見られる。ちなみに、『満済准后日記』にみる足利義教和歌会に「斯波左衛門佐」という人物がよく登場する。⁽³⁾義淳の官途は「左兵衛佐（武衛）」であるから、似ていて紛らわしいけれども、この「斯波

左衛門佐」を義淳とみなすことはできない。そこで注目すべきは、以下の記事である。⁽⁷⁶⁾

九七〇

【史料10】『満濟准后日記』永享二年三月一七日条

御連歌在之、^(二条持基)摂政参会被申也、御発句将軍御沙汰、

とをく問ふかひある花のさかり哉

千代をなれ見ん松と桜木

三

池水の月もしつかに春すみて

二

執筆蜷川入道・御連歌人数、^(信永)山名・赤松・一色吉原・京極加賀入道・赤松上総介・山名中務大輔・三上近江入^(満政)

道・玄阿・祖阿等也、^(斯波義淳)管領以下余大名被召出、御盃被下之了、^(下略)

意味するところはおおよそ次のようである。永享二年三月一七日花見のため足利義教が醍醐寺に入り、大名八人を交えて宴席が設けられた。ついで摂政二条持基も参加して連歌会が催された。発句は将軍足利義教が詠んだ。脇句は三宝院満濟、第三句は二条持基が続けた。執筆の役は蜷川周防入道信水がつとめ、「御連歌人数」として山名常熙、赤松満祐、一色吉原入道、京極高数、赤松満政、山名熙貴、三上周通、それに時衆の玄阿・祖阿等が参加した。

注目すべきはこのあとのくだりである。つまり管領斯波義淳以下余大名たちは「被召出、御盃被下」たものの、

「御連歌人数」⁽⁷⁷⁾に含まれていない事実である。山名常熙・赤松満祐といった有力大名は「御連歌人数」に含まれていないのに、前述のように「宿老」として重んぜられた管領斯波義淳がなぜ「御連歌人数」から除外され、連歌会に会衆として参加した形跡がまったくないのか理解に苦しむところである。

しかし、さきの三角氏の「政權運営のための一つの装置」という理解を援用すれば、足利義教が、幕府中枢を構成する有力大名を文芸を媒介にした政治力学によって相互牽制させる狙いがあった可能性も否定できまい。⁽⁷⁸⁾ むろん斯波義淳自身の連歌・和歌といった文芸好尚の性癖も考慮せねばならないが、義淳の没後跡を継いだ斯波義郷は、永享六年一〇月に足利義教より示された「玉津島御法衆人数交名」において伏見宮貞成親王以下全三七名に混じって「来月廿一日以前可詠進」と命じられている。つまり玉津島法衆として和歌の詠進を仰せつかっているのである。これを皮きりに、斯波義郷は義教主催の連歌会・和歌会に参加するようになっていく。⁽⁸⁰⁾ 斯波惣領家の一つの大きな転身であるといえよう。連歌会はこうしたところに「政權運営のための一つの装置」としての役割を果たしていたということができよう。

そこで、最後に連歌会における赤松満政の役割を概括的にいうと、まず満政がひとかどの文人であったことは認めねばならないし、そのことが足利義教に重用される一因であったこともまた事実であろう。しかし満政の政治的な基盤の第一は彼が足利義教の「近習」であったことであり、その点から考えると文芸面での満政の役割は足利義教の「政權運営のための一つの装置」を効果的に稼働させることにあったであろう。

(2) 和歌

後花園天皇の勅命で成立した最後の勅撰集『新統古今和歌集』（永享一年〈一四三九〉撰進）には、赤松満政の歌が一首収められている。同和歌集の撰集は足利義教の発意を受けたものであったから、撰者飛鳥井雅世が赤松満政の歌を入集させたのは義教の意向を付度した結果とも考えられる。その歌とは、以下のようなものである。⁽⁸⁾

左大臣家にて、池水久澄といふ事を

源 満政

万代といはねをめぐるながれまで しづかにすめる庭の池水

まずこの歌がいつ詠まれたかである。そのことを知るために、さしあたり『満済准后日記』に「池水久澄」という題で室町殿関係の詠草の所見があるか否か検索すると、以下二つの記事が認められる。

【史料11】『満済准后日記』正長二年三月二十六日条⁽⁹⁾

廿六日、晴、自飛鳥井宰相方、^(雅世)
室町殿御月次題送賜、池水久澄云々、今度初御位署可被遊之間、一首題云々、^(足利義教)

【史料12】『満濟准后日記』正長二年四月二二日条⁽⁸⁾

廿二日、少雨、今日室町殿御所御月次、一首題池水久澄、出題飛鳥井宰相雅世卿、日比御月次兼日三首也、雖爾御位署等可被書載初度御会之間、一首云々、仍每事嚴重、御所様御狩衣、予重衣、飛鳥井兄弟雅世卿・雅永朝臣、冷泉中将為之朝臣等同狩衣、武家輩悉直垂也、堯孝重衣、袈裟^{織色袴}、読師雅世卿、講師雅永朝臣、披講了御一献在之、公方御沙汰云々、(下略)

右の二つの記事の間にはおよそ一ヶ月の隔りがあるが、ともに義教の「今度初御位署」、つまりこの年四月一五日の義教の判始⁽⁹⁾を意識した記事内容である。題がともに「池水久澄」であるが、前者は満濟個人に詠草を求めたものであるから、先の満政の歌の入り込む余地はない。そうなると後者ということになるが、後者のケースでは正長二年四月二二日に室町殿御所で御月次和歌会が行われ、参加したメンバーの名とその服装について記されているが、注目すべきは「武家輩悉直垂也」の個所である。記事中にはその「武家輩」の名は具体的に挙げられていないけれども、そのなかに赤松満政が含まれており、先掲した『新統古今和歌集』に入集した一首がこの時赤松満政によって詠まれた可能性は高いといわねばならない。

このように考えると、先の満政の歌が詠まれた時期は正長二年四月ということになり、詞書に「左大臣(足利義教)家にて」とあるものの、足利義教は同年三月一五日に將軍宣下をうけ参議・左中将に任じられたばかりで(義宣から

義教への改名もこの時)、左大臣にはまだなっていない。⁽⁸⁵⁾ そのような時期に詠まれたのであれば、満政の歌の意味としては、待望の將軍宣下をすませて、これから新しい政治を開始しようとする足利義教の前途が長久で安泰であることを、義教の篤い信任をうける近習の一人としてことほいだものともみてよいと思われる。足利義教―赤松満政間の強い主従関係をさし示す歌である。

右の事例によって『満済准后日記』の室町殿和歌会関係記事に赤松満政の名が初めて登場するのが永享三年正月一日記、永享二年正月一三日条にみる室町殿月次和歌始⁽⁸⁶⁾に参加メンバーとして一括された「武家輩細川右京大夫持之・畠山阿波守(義忠)・赤松左京大夫入道性具(満祐)以下十余人歟」のなかに赤松満政が含まれていた可能性さえあるし、また「室町殿御月次今日云々、予不参」云々と記された正長二年五月晦(三〇)日条の和歌会⁽⁸⁷⁾には、満済は欠席したが赤松満政は参加したことさえありえる。つまり史料的な制約による不明の部分を含めて勘案すると、満政の室町殿和歌会参加は、義教主催の月次和歌会が開始される正長元年四月二十九日⁽⁸⁸⁾以来継続した可能性も否定できないのである。

赤松満政の歌としては、勅撰集以外では、いくつかの神社に奉納された詠草のなかに数首が残っている。具体的にいうと、「永享十年石清水社奉納百首」に「瀬月」「古郷月」「月前鶉」を詠んだ歌計三首⁽⁸⁹⁾、「永享十一年石清水社奉納百首」に「鶉川」「遠恋」「寄獣恋」を詠んだ歌計三首⁽⁹⁰⁾さらに「永享十三年松尾社法楽百首」に「夏月」「旅」を詠ん

だ歌計二首、総計八首がさしあたり認められる。いずれも風月や叙情を詠んだもので、政治的な色あいはない。

他方、將軍足利義教が幕府行事として開催した室町殿和歌会において、赤松満政はどのような動きを示しているかについてみておこう。室町殿が主催する和歌会についてはすでに三角範子「足利義教とその和歌会」という専論があり、それによると以下のように簡潔に総括されている⁹¹。

月次和歌会は正長元年四月二九日に始まり、その様式は段階的に確立される。政権初期の不安定なところ、義教が幕政の頂点に立つことを示す一連の武家儀礼や権門への御成がみられる。この時期に月次和歌会を始める意図は、義教が室町殿として相当の文化的容量を備えることを示し、將軍権威の確立および強化を目指すことにあると考えられる。月次和歌会の開始は、義教の政権運営の一環に位置づけられるのである。

和歌が古代以来の正統的な文芸として社会の上層部にもてはやされたことは多くの和歌史研究が明らかにしているが、足利義教の和歌会が基本的にはそういう伝統のうえにあったことは認めねばなるまい。義教の和歌会についてみると、連歌会の場合と同じ側面と異なる側面とがある。まず会衆の顔ぶれからいえば、前述のように和歌会・連歌会ともに参加するいわば常連たちがいる。これに加えて、和歌会のみに参加するメンバーには、公家では飛鳥井雅世（中納言。題者・読師）、同雅永（左中将。講師。雅世の弟）・同雅親（少将。雅世の子）・冷泉為之（左中将）が、武

家では畠山義忠（阿波守）・斯波左衛門佐・細川持春（下野守）・同持賢（右馬助）・同満□（陸奥守）・同持之（右京大夫。但し永享三―四年）赤松義雅（伊予守。但し永享四年一〇月以降）が、また寺家では堯孝（権少僧都。その高祖父は頼阿であるという）⁽²⁾が挙げられる。飛鳥井家は和歌を家学としており、その一門の出である雅世・雅永兄弟、それに雅親（雅世の子）はそうした専門的な立場から和歌会をリードしたに相違ない。

足利義教主催の和歌会も、連歌会と同様に「政權運営のための一つの装置」としての性格を持ったであろう。相違するのは、和歌と連歌の文芸としてそれぞれに持つ性格と歴史のちがいであったろう。したがって和歌会の会衆の一人としての赤松満政の役割は、既にのべた連歌会のそれと同様とみてよいであろう。

四 嘉吉の乱後の赤松満政

嘉吉元年（一四四一）六月二四日に生起した將軍謀殺事件、所謂嘉吉の乱は、伏見宮貞成親王によって「將軍如此犬死、古来不聞其例事也」（『看聞御記』同二五日条）と評されたが、この事件が多方面に与えた影響は甚大であった。赤松満政の身の上にはどのような影響がおよんだであろうか。注意すべきは、事件への幕府首脳部の対応の仕方である。『看聞御記』が「於御前無腹切人、赤松落行、追懸無討人、未練無謂量、諸大名同心歟」（同前）といぶかっているように、足利義教の亡骸の前で切腹する人もなかったし、播磨に落ち行く赤松を追いかけて討とうとする人もなかつ

た。貞成は「諸大名同心歟」とまで言い切っている。

赤松満祐ら反乱分子への幕府当局の対応行動は敏速というにはほどとおく、満祐・教康父子追討を命ずる後花園天皇綸旨が管領細川持之にあててくださったのは、嘉吉元年八月一日のことである。⁽⁸⁾ おそらく事件をめぐる有力大名たちの思惑が交錯し、対応に手間どったものと考えられる。

『看聞御記』嘉吉元年六月二六日条によると、義教の跡目は八歳の嫡子義勝が嗣ぐことになり、「若公（義勝）御成人之間ハ、管領政道可申沙汰云々、武家被突鼻人々皆管領免許云々」、つまり義勝が成人するまでは管領が政務を執り、足利義教に突鼻された面々は管領が赦免するという方針が示された。⁽⁹⁾ 嘉吉の乱を経て、將軍の専制権に掣肘を加えるという方向で幕府政治の運営方法が大きく軌道修正されると、將軍近習であった赤松満政をとりまく政治的環境は大転換を余儀なくされたものと考えられる。

(1) 赤松貞村のかかわり

先掲の【史料1】において、満政とともに赤松惣領家に対して「別心」だと記された貞村（伊豆守、赤松春日部）は、嘉吉の乱とどのようなかかわりを持ったのだろうか（『看聞御記』によると事件当日「赤松伊豆（貞村）等ハ逃走」とある）。足利義持―義教と続けて室町殿に重く用いられた赤松貞村の、⁽¹⁰⁾ 嘉吉の乱後の動向は注意してよい。

播磨に落ちた赤松を追討するための幕府の軍勢派遣は遅々として進まなかった。『看聞御記』嘉吉元年六月二七日

条では「赤松討手細川讃州（持常）・山名、・赤松伊豆（貞村）・廷尉等諸大名可発向云々」といいつつも、『建内記』嘉吉元年七月六日条によると、事件後一〇日以上もたったこの日に「赤松誅罰事、発向遅引慮外事也、今月中少々可進発云々」という状況であり、実際に討伐軍が京都を発ったのは同月一日のことで、赤松貞村はその軍勢の一角をなしていた。⁽⁹⁷⁾

赤松貞村と足利義教との関係については『建内記』嘉吉元年九月二四日条に興味深い記事がある。⁽⁹⁸⁾

【史料13】『建内記』嘉吉元年九月二四日条

今度赤松播磨守護職、^(赤松貞村)彼競望之間、^(足利義教)普広院殿有御結構之企之由、有浮説、赤松不慮惡道存企了、^(逆イ)仍人々惡厲階着致沙汰歟之由、是又浮説也、

ここには「浮説」としながらも、嘉吉の乱生起の契機が述べられている。それは赤松貞村が播磨守護職を競望したから、足利義教は貞村に同守護職を与えようと企んだ。そのため満祐ははからずも悪逆に走ってしまったのであると。事件発生の背景的事情として義教の赤松抑制の意図があったのは明らかであるから、義教が貞村のために播磨守護職を与えようと企てたとしても一向に不思議ではない。⁽⁹⁹⁾

赤松貞村が追討軍に加わったのはそのような理由によると思われるが、貞村の幕府軍としての戦いぶりについては

『建内記』嘉吉元年八月二日条などに記されている。また卒去については同記、嘉吉元年九月二四日条に「伝聞、赤松伊豆入道（貞村）於播磨国陣敵陣未定之後、円寂云々、或落馬或夜討之由、其説不同也」とあり、その死去の伝聞を伝えているが、貞村の活動は少なくとも嘉吉三年ころまではたどれる。⁽¹⁰⁾

(2) 播磨守護職の争奪戦

赤松満祐らが播磨に没落した後、これから追討軍を派遣しようとする嘉吉元年七月六日の時点において、満祐が帯びていた播磨・備前・美作三国の守護職の扱いについて幕府首脳部は次のように認識していた。

【史料14】『建内記』嘉吉元年七月六日条

備前・美作両国守護職事、依誅罰忠功之仁、可被充行之由評定在之、播磨国守護事、猶可被定人躰歟之由有沙汰、其猶可随軍功之由評定云々、共以可然事也、

つまり満祐から没収した三ヶ国のうち、備前と美作は今度の討伐戦での功績によって宛行う。残りの播磨についても軍功に従うが、なおよく人躰を見定めて沙汰するということを幕府評定によって申し合わせていたのである。三ヶ国のうち特に播磨は慎重に取り扱うという意思表示をしている様子がわかる。

かくして嘉吉元年九月一〇日に赤松満祐が討ち捕られると、播磨守護職を誰に与えるかという問題が急浮上してきた。『建内記』の嘉吉元年九月一二日条にはそのことが直截に記されている。

【史料15】『建内記』 嘉吉元年九月一二日条

(満祐の頸を火中より探し出したあと) 仍^(赤松満政)播磨守与^(持豊)山名可相論^(播磨守護職)守護職歟云々、(下略)

播磨出身の赤松満政にとっては播磨守護の獲得は悲願であったし、また但馬守護山名持豊にとっては勢力拡大のための千載一遇のチャンスであった。しかも山名一族は赤松満祐追討軍の急先鋒であったし、播磨守護職獲得は決して譲れない一線であった。史料は語らないけれども、幕府の首脳部をまきこんで両勢力の間で激しい争奪戦が繰り広げられたに相違ない。結局、播磨守護職を獲得したのは山名持豊であった。当時の幕府政局における存在の必要性、および力関係において赤松満政は山名持豊に敗れたというしかない。かつては強力な支援をおしなかった足利義教の不在も影響したであろう。

ここで確認すべきことは、播磨守護が山名持豊に決まったのはいつかということである。そのことを知りうる史料が残っている。

【史料16】「足利將軍御内書并奉書留」所収、細川持之書状

播磨国守護職事、被成御教書候、目出候、但明石・賀東・三木三郡事、被置御料所候、就中伊豆守・龍門寺

左馬助等跡事、随軍忠之浅深、可被充行、方所々可有御心得候、恐々、

(嘉吉元年)

後九月五日

右○細川持之

謹上 (持豊)
山名殿

右の文書は時の管領細川持之が、播磨守護に決まった山名持豊に対して賀意を表したものである。これによって山名持豊が播磨守護になったのは嘉吉元年閏九月であったことがわかる。あわせて山名持豊の播磨守護職から明石・加東・三木(美囊)の三郡が御料所として切り離され、持豊の管轄外に置かれることとなった。この三郡は、播磨国の最東部地域として摂津国に隣接する区域である。のちに述べるように、この三郡は赤松満政の支配下に置かれたのである。実質的には分郡守護職である。二人が激しく播磨守護職を争奪したため、こうした折衷案が採用されたといえる。ちなみに赤松貞村の所領が闕所化され、軍功の対象地となっている点も注意される。

(3) 「三郡守護」 赤松満政

赤松満政自身が満祐追討に出陣したことは、『建内記』嘉吉元年九月一二日条に「後聞、播州木山城已初責落、赤
赤松満政小考(森)

松父子父滿祐法師、子教康 於赤松播磨守滿政陣、自殺了」とあることによって知られるが、その戦いの具体的様相については明瞭ではない。翌閏九月になると戦いは終息して、赤松滿祐所領の再配分が公示された。「斎藤基恒日記」嘉吉元年閏九月条にはその公示内容が詳しく書き留められている。⁽¹⁶⁾

それは、「性眞（赤松滿祐）分国補任人数」として、播磨守護には山名右金吾（持豊）、備前守護には山名兵部少輔教之、美作守護には山名修理大夫入道常勝（教清）をあて、播磨国内三郡（明石・加東・美囊）⁽¹⁶⁾の分郡守護に赤松播磨守滿政を充てるというものである（加えて摂津国中嶋郡は細川右馬助持賢）。赤松滿政にいわせれば自らに過少な配分であつたろう。しかし見方を変えれば、それが嘉吉の乱後の幕府政治にしめる赤松滿政の実力の程度であつたといふことができる。

以上三つの分郡守護としての赤松滿政は実際その職務を果たしている。『建内記』の嘉吉元年一〇月あたりの記事を見ると、美囊郡に属する吉川上庄、同重末・行両名の所領経営に関して領主万里小路時房の要請に応じて手立てを講じている事実があるし、翌一一月には吉川庄内法光寺領に対する寺領安堵状、さらに翌一二月には東大寺戒壇院領大部庄（加東郡）の節季人夫役に関する書下などの発給文書も残している。⁽¹⁷⁾

また前後の脈絡がなくて背後関係が不明ではあるが、『看聞御記』嘉吉三年四月七日程によると、この日の天明の時分、赤松滿政は「不当猛悪者」という理由で家人の大田を討つたことが知られ、また同年九月二日程には、山名勢と市原郷民とのこぜりあいの際山名側の合力者の一人としてその名を見せている。⁽¹⁸⁾

(4) 赤松満政の失脚

しかし、播磨・但馬守護山名持豊の勢力はまもなく赤松満政を排除し、その三郡守護職を包摂することになる。それは当然ながら満政の没落を意味した。満政の三郡守護職没収に関する直接史料は以下のものである。^⑩

【史料17】『建内記』文安元年（一四四四）正月二二日条

（補書）「後聞、播磨国内三郡、為御料所被宛行赤松播磨守入道之処、惣□□護山名右衛門督入道持豊（満政）無相違称軍

功強望申之、年内已治定、今日管領成御書下、三ヶ郡（畠山持国）の彼一具拝領云々、中々物謂、静謐之基歟、

莫言々々、」

【史料18】『斎藤恒基日記』同日条

廿二日、播磨国三郡事、退赤松播州（満政）、給山名金吾（持豊）、奉行永祥（飯尾為種）、

要するに、文安元年（一四四四）正月、播磨守護山名持豊は「軍功」と称して満政の三郡守護職を強く要求した。

すでに前年のうちに持豊の三郡守護職獲得は決定事項となり、文安元年正月二二日に管領畠山持国が「御書下」を成して、三郡はまとめて持豊に与えられることとなった。ここでいう「御書下」とは、管領畠山持国が奉ずる管領下知状と考えられる。赤松満政は嘉吉元年（一四四一）閏九月に得た三郡守護職を文安元年（一四四四）正月に没収され

たわけである。

このち、赤松満政は文安元年一〇月二五日に子息教政らとともに播磨国に没落、翌一月に入ると山名持豊をはじめとする山名一族が赤松満政退治のため波状的に播磨国へ下向、国中は混乱した。¹¹¹益田氏や毛利氏など山陽・山陰の有力国人たちも幕府によって動員されている。¹¹²文安二年正月二〇日の「播州合戦了」¹¹³を経て、同年二月九、一〇日にも播磨国で合戦があり、同年四月四日には「赤松播磨入道（満政）父子」らの首が京都の五条河原にかけられた。¹¹⁴

おわりに

本稿では、室町時代前期の「室町殿」足利義教に主として仕え、その近習として活動した赤松満政の足跡を通して、同時期の幕府政治史の一端を垣間見た。その結果、足利義教の「室町殿」としての権力の構築に赤松満政は大きく関わっていたことが明らかとなり、同時に赤松一門内における赤松満政の地位と権力が「室町殿」との結びつきと深く関係することも知られた。特に足利義教主催の連歌会・和歌会における赤松満政の役割が、そうした文芸の会を政権運営のための装置として機能させるうえで無視することができないこともわかった。

幕府―守護体制を基軸とする室町幕府の運営のなかで、「室町殿」が政治手法のうえで専制的性格を持とうとするのは理の当然であろう。有力守護からなる重臣会議がそれにブレーキをかけるというのが普通のパターンなのである

が、有力守護赤松家に出自をもち、しかも惣領家に対して自立的な有力庶家出身の近習赤松持貞、同赤松満政はその時々「室町殿」にとっては惣領家の勢力を掣肘するうえで格好の尖兵たりえた。しかし「室町殿」の目論見は双方の場合ともにはずれ、かえって墓穴を掘る結果を招いた。本稿で述べた赤松満祐による足利義教謀殺事件、そしてこれに続く赤松満政の失脚と没落は、室町幕府体制の現状と行く末を象徴するものであった。

一門内の自立性が高いといわれる赤松家の、惣領家と有力庶家との対立抗争をエネルギー源の一つとする政治的世界への強い発言力は、当時の特有の社会的諸要因と連鎖することによって室町時代史を強力に牽引したといえることができる。なかでも、赤松家の歴史的役割の評価は、室町幕府や「室町殿」権力の性格を考えるうえだけではなく、室町時代史全体を理解するうえで重要である。

(1) 大日本古記録『建内記三』岩波書店、二四六頁。

(2) 赤松円心が足利尊氏の室町幕府樹立に果たした功績の大きさはいうまでもないが（高坂好『赤松円心・満祐』吉川弘文館、一九七〇年三月、四七～六〇頁参照）、子息則祐とその子義則（惣領）については赤松氏の興亡を書いた「赤松記」（奥書によると、一族の得平因幡守入道定阿が八四歳の天正一六年（一五八八）八月に書いたという。『群書類従』二一輯所収）に記事がある。則祐については「將軍家につかへ大忠ありし人なり」（同書、三五七頁）と、また義則については詳しい武勇伝が記され、その功績によって足利將軍から「御恩賞」として因幡国知頭郡、但馬国朝来郡、摂津国中嶋をあてがわれた（同書、三五七～三五八頁）。

(3) 赤松家の歴史を綴った「嘉吉記」（『群書類従』二〇輯所収）によると、文安二年（一四四五）の春に赤松教政（満政の子）が幕府との戦いに敗れたとき、幕府は「赤松播磨入道（満政）ガ子三郎（教政）ハ内野合戦ニ討死セシ満則ガ孫也。旧功思召ケルニヤ赦免アリ」（同書、三三二頁）として、教政を祖父満則の旧功に免じて赦免しようとした経緯がある。なお明德二年二月の「内野合戦」（明德の乱）における、幕府側武將としての赤松満則の軍忠については『明德記』（岩波文庫）に詳しい。

(4) 「嘉吉記」（『群書類従』二〇輯、三二七頁）。

(5) 赤松持貞をめぐる諸問題については、拙稿「赤松持貞小考―足利義持政権の一特質」（『中世日本の政治と文化』思文閣出版、

二〇〇六年一〇月。初出は二〇〇一年九月）がある。

(6)『統群書類従』五輯下および『系図纂要 第九冊』（名著出版）におさめる各種「赤松系図」によると、赤松満政の官途として、①右馬助②右京亮③右京大夫④左京大夫⑤大膳大夫⑥兵部少輔⑦刑部少輔⑧上総介⑨播磨守が拾える。さらに『朝日 日本歴史人物事典』（朝日新聞社、一九九四年一月）に収める「赤松満政」（榎原雅治氏執筆）によると、⑩「宮内少輔」も加えられている（同書、二五頁）。しかし、筆者は以下本文で述べるように、系図類を除いた文書・記録史料によるかぎり、①～⑥、および⑩は確認できていない。他方、⑦～⑨は文書・記録によって確認することができるが、本文で述べるように、満政は⑦から⑧へ移る間に⑪「刑部大輔」を名乗ったことがある（「安養寺文書」（備前）応永三十二年三月二日赤松満政寄進状、『岡山県古文書集 第一輯』思文閣出版、一九八一年二月〈初版は一九五三年三月〉、一八頁）。

(7)『群書類従』二六輯、一二二～一二三頁。

(8)「十徳」とは「広袖・垂領（たくりくび）形の上衣で、衿はみごろの裾までついた半身衣」で「もともと武家服飾ではあるが、下級武士の旅装、あるいは犬追物の犬引、馬の口をとるような小者が着たもの」（『国史大辞典6』吉川弘文館、一九八五年一月、八九三～八九四頁）、また「室町時代の脇縫いの小素襖（こすおう）。四幅袴（よのばかま）とあわせて用い、將軍供奉の走衆以下の召具（めしぐ）が着用した」（『日本国語大辞典6』小学館、二〇〇一年六月、八五七頁）とされる。ここでは義持の伊勢参宮に随従した者たちが旅装の「十徳」を着したので、「十徳」と呼ばれたのである。同時期の用例としては他に例えば『満濟准后日記』正長二年六月六日条、同年六月十九日条、永享四年二月三日条などに見られる。

(9) このことは、竹内智広氏「室町幕府と赤松氏―申次赤松満政の活動を中心として―」(『年報赤松氏研究』創刊号、二〇〇八年三月、五五～五六頁)で指摘されている。また同氏は「義持政権において満政が担当した『十徳』とは、奉公衆のこと」と解している(同氏論文、五六頁)。

(10) 『群書類従』二六輯、一二九～一三〇頁。

(11) この応永三〇年十一月九日条には、「御供事皆十徳」の記事のあとに、畠山持国以下全一一名の武将名を列挙し、続けて「以上十一騎、此外遁世七人參也」と記される。この記事で「十一騎」とは前掲の一人の武将をさすこと明白であるから、「此外遁世七人參也」とはその他に七人の遁世者がいたことを意味している。この七人の遁世者の名は「十徳」として書き出されていない。このことを踏まえて前出の「花宮三代記」応永一九年九月一八日条の記事と比較すると、九月一八日記事に書き出されている「畠山持国」以下「知阿弥」までの全一四人のうち、武将と認められない「薬師三位^{允能}」から「知阿弥」までの五人は「十徳」ではなく、十一月九日記事にいう「遁世」であった可能性が高い。ちなみに「薬師三位^{允能}」とは『満濟准后日記』など当時の史料に散見する「医師三位^{胤能}」のことと考えられる。なお「医師胤能」の以降の動向については「師郷記」永享一一年四月二二日条(史料纂集『師郷記三』一四〇頁)参照。

(12) 高橋修氏は、赤松満政は「義持の時代から近習として活動している」と述べ(同氏「足利義持・義教期における一色氏の一考察―一色義貫・持信兄弟を中心として―」『史学研究集録』8、一九八三年三月、四五頁)、義持期においても満政は義持の「近習」であったとしている。

(13) 『岡山県古文書集 第一輯』一八頁。

(14) 『兵庫県史 史料編 中世』兵庫県史編集専門委員会編、一九八七年三月、六三三頁。

(15) 新訂増補国史大系『公卿補任 三』一一七頁。

(16) 『建内記』永享二年七月二五日条（大日本古記録『建内記 二』一五一～一六七頁）。

(17) 『建内記 二』一六七～一六八頁。なお「普広院殿御元服記」（『群書類従』二二輯所収）の後半部「永享二年七月廿五日 大將拝賀」（同書一四三頁）の個所にも載せられているが、『建内記』所収本と『群書類従』所収本とを比較してみると、『群書類従』本では『建内記』本にみえる「佐々木黒田備前守高光」および「佐々木朽木五郎時綱」の二名を欠落させている。永享二年七月当時、幕府の侍所頭人には赤松惣領の満祐が就いており、赤松家からの「帯刀」出仕はそのことと関係するものと思われる。

(18) 『日本国語大辞典 8』小学館、二〇〇一年一月、九六四頁。

(19) 例えば『八坂神社文書』下（名著出版、一九八四年五月）に収録される、幾多の「上総介」赤松義則あての幕府文書をみよ。

(20) 京都帝国大学文科大学叢書『満済准后日記 卷三』二二六頁。

(21) 同前、一六九頁。

(22) 同前、一七九頁。同記事中にみえる「赤松播磨守大河内事也」がそれである。

(23) 設楽薫「足利義教の嗣立と大館氏の動向」（『法政史学』三一、一九七九年三月）三六～三八頁。

(24) 四回の連歌会とは、永享二年正月一九日（『満済准后日記 卷三』二二五～二二七頁）、同年二月七日（同、三四～三五頁）、同年

三月一七日（同、四二～四三頁）、同三年正月一九日（同、一六九～一七〇頁）の各日条にみられる連歌会をさし、一回の和歌会とは、永享三年正月一三日条（同、一六四～一六五頁）にみる「御歌御会始」のことである。

(25) 『満濟准后日記 卷二』二六頁。

(26) 「室町殿行幸記」は『群書類従 第三輯』に収められるが、同冊に同じ行幸のことを記す「永享九年十月二十一日行幸記」という記録も収められている。「帯刀」の部分に限って比較すると大きな違いは認められないが、ただ第一〇番に組まれている二人のうちの一人の名のみ両記録において異なっている。すなわち前者では「佐々木遠江守」、後者では「佐々木孫九郎教孝」であるという違いである。

(27) 『続群書類従』二輯上に収録される。

(28) 以上の二つの「帯刀」記事について、赤松一門の参仕状況を見ると、「行幸記」にみえる赤松義雅・赤松則繁・赤松満政・赤松祐・赤松持忠・赤松持長・赤松持広・赤松持豊・赤松貞富・赤松貞雄の全一〇人で、全体の三分の一を占めている。また「石清水放生会記」については、赤松義雅・赤松則繁・赤松満政・赤松祐広・赤松持祐・赤松持忠の全六人で、ほぼ同程度の割合を占めている。顔ぶれを比較すると、後者の全六人のうち五人は前者一〇人のなかに含まれることも知られる。赤松一門から多くの「帯刀」を出しているが、この現象は赤松家の惣領満祐が幕府の侍所頭人をつとめていたことと関係するものと考えられる（赤松満祐は永享八年八月から同一一年一月以降まで侍所頭人に在職）。

(29) 『角川日本地名大辞典 兵庫県』（角川書店、一九八八年一〇月）「さづち 佐土（姫路市）」の項（同書、六七八頁）、『日本

歴史地名大系 兵庫県の地名』(平凡社、一九九九年一〇月)「佐土余部・佐土郷」の項(同書、五五二頁)。

(30) 注(14)と同じ。

(31) 『満済准后日記 卷三』七六五～七六六頁。

(32) 高坂好氏『赤松円心・満祐』吉川弘文館、一九七〇年三月、二〇〇～二〇一頁。

(33) 「満済准后日記」永享六年六月二八日条『満済准后日記 卷三』八二〇頁。

(34) 赤松満政の「申次」行為の史料上の実例を一つ挙げよう。「満済准后日記」永享三年六月一二日条に「参室町殿、御対面、申次赤松播磨守(満政)」「満済准后日記 卷三」二四四頁とあるが、満済が足利義教に対面するにあたっての申し次ぎを赤松満政が行ったという意味である。役職名というより行為を意味する普通名詞とみたほうが実態に即している。なお、満政は満済からの祈禱巻数を請け取った所見があるが、「満済准后日記」永享三年二月二九日条では一色左京大夫(持信)が、また同六年正月二九日・同七年正月二九日条では伊勢貞国も同様に満済から巻数を請け取った所見がある。

(35) 竹内智宏「室町幕府と赤松氏」(『年報赤松氏研究』創刊号、二〇〇八年三月)五五頁、および六七～六八頁。

(36) 「満済准后日記」永享二年正月二六日条にみる「参御前、御使赤松大河内(満政)也、就大館入道(満信)事、被仰旨在之」

『満済准后日記 卷三』三二頁の記事。なお竹内氏はこれを二七日のこととするが、正しくは二六日である。

(37) (嘉吉元年カ)六月一三日赤松満政書状(大日本古文書『上杉家文書一』六四～六五頁。『新潟県史 史料編3 中世1』新潟県、一九八二年三月、五二七頁)。

- (38) 竹内智宏「室町幕府と赤松氏」七一～七四頁。
- (39) 「満済准后日記」永享三年五月二日条（『満済准后日記 卷三』一三〇頁）。
- (40) 「満済准后日記」永享五年六月二日条、同年閏七月晦日条（『満済准后日記 卷三』六二三、六五七頁）。
- (41) 「満済准后日記」永享二年一月一四日条（『満済准后日記 卷三』一三三頁）。
- (42) 「満済准后日記」永享三年三月一七日条（『満済准后日記 卷三』一九〇頁）。
- (43) 「満済准后日記」永享二年七月二日条（『満済准后日記 卷三』八七頁）。
- (44) 図書寮叢刊『九条家歴世記録』明治書院、一九九〇年三月。
- (45) 「満済准后日記」永享二年一月二四日条（『満済准后日記 卷三』一四四頁）。
- (46) 大日本古文書『醍醐寺文書別集二』一三二八―一三三〇号（永享三年）三月一九日准三后満意書状。
- (47) 「満済准后日記」永享四年一〇月一〇日条（『満済准后日記 卷三』五二二～五二四頁）。
- (48) 「満済准后日記」永享六年六月一三日条（『満済准后日記 卷三』八二頁）。
- (49) 「満済准后日記」永享六年三月二日条（『満済准后日記 卷三』七七四頁）。
- (50) 拙稿「室町前期の国家祈禱と幕府財政―修法供料の支出における伊勢貞国・赤松満政の関与をめぐる―」（『福岡大学人文論叢』四二―二、二〇一〇年九月）。
- (51) 「満済准后日記」永享二年二月一四日条（『満済准后日記 卷三』一四九頁）。

(52) 「満済准后日記」 永享四年七月四日条（『満済准后日記 卷三』四八六頁）。

(53) 『満済准后日記 卷三』五〇七～五〇八頁。

(54) 永享三年一〇月一六日条、同四年正月三日条、同年四月一四日条、同年一〇月七日条、同五年八月一二日条、同六年三月六日条。

(55) この文書は『新潟県史 史料編3 中世1』五二七頁に掲載される。大日本古文書『上杉家文書1』が「判留」に作る宛て名については、『新潟県史』は「判門田」とする。「判門田」と読むのがよいと考えるが、「判門田」とは『満済准后日記』に上杉安房守憲実の使節として散見する「羽田」のことで、上杉氏の被官と考えられる。竹内智宏氏は判留氏を「上杉憲実の京雑掌」とする（同論文六七頁注6）。

(56) このように考えれば、「赤松播磨（守）状」を「近習奉書」（高橋修「足利義持・義教期における一色氏の考察」『史学研究集録』八、一九八三年三月、五一頁）とか「申次奉書」（竹内智宏「室町幕府と赤松氏」『年報赤松氏研究』創刊号、二〇〇八年三月、六八頁）と呼んでさしつかえないと思われる。なお山家浩樹「申次の奉書」（『遥かなる中世』8、一九八七年九月）参照。

(57) 「看聞日記」 永享五年七月二四条に収める（『看聞日記 四』一九二～一九四頁）。なお全一二条のうちの冒頭二ヶ条を欠いているが、大日本古文書『醍醐寺文書六』（二六三～二六五頁）にも収録する。

(58) 「看聞日記」 永享五年閏七月八日条に収める（『看聞日記 四』一九八頁）。

(59) 「看聞日記」 永享五年閏七月二五日条に収める（『看聞日記 四』二〇三～二〇四頁）。

(60) 『満済准后日記 卷三』六三九頁。

(61) 『満済准后日記』永享五年閏七月二一日条（『満済准后日記 卷三』六四九頁）。

(62) 下坂守氏『中世寺院社会の研究』（思文閣出版、二〇〇一年二月）。とくに第三章「中世土蔵論」、初出は一九七八年七月。

(63) 『満済准后日記 卷三』六四九～六五〇頁。

(64) 飯尾肥前守為種については、「満済准后日記」永享五年閏七月二五日条に「…尾張国へ下国、強非流罪儀歟」とあるように『満済准后日記 卷三』六五六頁）、それはとても「流罪儀」といえるようなものではなかったし（『看聞日記』永享五年閏七月二六日条には「飯尾肥前、為上意逐電了」とある。『看聞日記 四』二〇四頁）。さらに、飯尾為種はすでに翌永享六年四月二五日には幕府に復帰している（『満済准后日記 卷三』七八二頁）。

また猷秀についてみると、東京大学史料編纂所架蔵影写本「足利將軍御内書并奉書留」に収める「（今川）遠江入道」あて、（永享五年）後七月二六日管領細川持之書状に、「光聚院猷秀、依山門訴訟、処流罪候、可然在所可被置候、此仁 上意未相替候、然者前々流人ニ不可被准候、能々可被加持候、」とあるのが目にとまる。猷秀は山門の訴訟によって流罪に処されたが、足利義教の猷秀に対する覚えはかわっていないので、前々の流人に准じないでよくよく扶持を加えるようにとの要請で、要するに、猷秀は特別待遇を受けているのである。

(65) 『看聞日記 四』二〇四頁。

(66) 竹内智広氏はこの「赤松大河内事、可被預宗領（満祐）云々」の記事を根拠として、満祐と満政とが対立したとはいえない

とし、「満祐が満政に反発していた記事は、管見の限り見られない」とするが（竹内「室町幕府と赤松氏」「年報赤松氏研究」創刊号、二〇〇八年三月、五九頁）、一般的にいつて、進退に窮した一門庶家の身柄を惣領が預かることは当時の武家社会の慣行であったとみられることから、この記事をもって満祐と満政との人的関係を議論することは困難と思われる。やはり先に【史料1】で示したように、同族内で有力庶流の赤松満政・同貞村と惣領満祐との間には通説のように対抗関係があったと想定すべきであろう。

(67) 『満済准后日記 卷三』六五八頁。

(68) 「九州史学」一二二、一九九九年五月。

(69) 同右、一九頁。

(70) 同右、一四頁。

(71) 同右、八頁。

(72) 斯波義重の遁世のことは「満済准后日記」応永二年六月九日条にみえる（『満済准后日記 卷一』九〇頁）。

(73) 斯波義重の死去のことは「看聞日記」応永二年八月一八日（没）、一九日条にみえる（『看聞日記 一』二二六～二二七頁）。

(74) 斯波義淳を「宿老」と称した実例としては、「満済准后日記」永享四年二月一〇日条に「宿老両三人大名」（左兵衛佐斯波義淳〈当時管領〉・左衛門督畠山満家〈前管領〉・右衛門督山名常熙をさす）とみえる。ちなみに各人の永享四年当時の年齢は、

斯波義淳三六歳（『満済准后日記』永享五年一二月一日条によると、この日三七歳で没）、畠山満家が六二歳（『師郷記』永享五

年九月一九日条によると、六三歳で没)、山名常熙は六六歳(『看聞日記』永享七年七月四日条によると、この日没。六九歳)。

(75) 「斯波左衛門佐」が登場するのは、永享三年正月一三日条、同年二月二八日条、同四年正月一三日条、同年一〇月二九日条の全四カ所であり、いずれも足利義教主催の和歌会の場合である。

(76) 『満済准后日記 卷三』四三頁。

(77) 『満済准后日記』には「御連歌人数」という言葉が散見する。この言葉は足利義教主催の連歌会に常時参仕する固定したメンバーと考えられるが、その連歌会にはそれに属しない「非御連歌人数」(同日記、永享四年三月四日条。一色修理大夫・細川讃岐守持常)や「御連歌人数之外」(同日記、永享四年三月一九日条。畠山〈満家カ〉・細川・一色ら六人)が臨期に召し加えられることがあった。

(78) 斯波義淳が管領職就任を渋ったことが「満済准后日記」正長二年八月二一日条(『満済准后日記 卷三』七一八〜七一九頁)や同日記、同年八月二四日条(同七二〇〜七二二頁)などに見え、就任したのちも辞任の意志を表明していたことが同日記、永享二年一月二八日条、同三年九月一二、一四日条(同二三八頁、三〇三〜三〇五頁)などに見えるが、この管領職に対する非積極的意識は、連歌会・和歌会への不参加とは一脈のつながりのある可能性を否定できない。なお義淳の管領就任・辞任の経緯については、河村昭一「管領斯波義淳の就任・上表について」(『兵庫教育大学研究紀要』二八、一九九八年二月)がある。

(79) 斯波義郷は、『満済准后日記』永享五年一月三〇日条によると、斯波義淳(永享五年十二月一日に没。『満済准后日記』同日条。『尊卑分脈三』二五八〜二五九頁によると義淳―義郷の関係は父子とする)の跡をうけて、斯波家を嗣ぐことになる「相

国寺僧瑞鳳藏主^{左衛門佐兄也}」の還俗した後の名前である。ちなみに割注にみえる「左衛門佐」とは、先に述べた斯波一門で義教和歌会に参加した「斯波左衛門佐」のことであろう。注(75)参照。

(80) これ以降の斯波義郷の連歌会・和歌会への参加状況についていえば、永享七年正月一三日開催の足利義教主催「御歌御会」に斯波氏の嫡流では初参加しているし、『満済准后日記』同日条に「^{斯波信大輔}義郷^{当初}」とある、永享七年三月二一日の義教主催「北野社一万句御連歌」では「治部大輔（斯波義郷）」で連歌を詠進している。

(81) 『新編国歌大観第一巻 勅撰集編』（角川書店、一九八三年二月）七三九頁、八〇九番。

(82) 『満済准后日記 卷二』六六〇頁。

(83) 『満済准后日記 卷二』六七四頁。

(84) 『史料綜覧 卷七』五六一頁。

(85) 足利義教が左大臣に在職するのは、『公卿補任 第三篇』によると、永享四年八月二八日〜同一〇年八月二八日の間である（同書、一二三頁、および一三四頁）。

(86) 『満済准后日記 卷三』二二頁。

(87) 『満済准后日記 卷二』六八五頁。

(88) 井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町前期（改訂新版）』風間書房、一九八四年六月（初版は一九六一年二月）、一〇三〜一〇五頁。

(89) 『続群書類従 一四輯下』六七八〜六八〇頁。

- (90) 『続群書類従 一四輯下』六八二、六八四、六八五頁。
- (91) 『日本歴史』六四九号（二〇〇二年六月）二九頁。
- (92) 『満済准后日記』永享三年一〇月二五日条（『満済准后日記 卷三』三二七頁）。
- (93) この時の赤松治罰繪旨の文章が推敲を重ねて確定するまでのいきさつは「建内記」嘉吉元年七月三〇日条に詳述されている（『建内記三』三〇一―三〇四頁）。ちなみに「公名公記」嘉吉元年八月五日条にこの治罰繪旨が写し取られている。
- (94) この時赦免された公卿、つまり「出仕御免」の「公家人々」の面々の名は「建内記」嘉吉元年七月一〇日条に載せられている（『建内記三』二七六頁）。そのほかに陰陽師家の勘解由小路三位在方なども屏居から解放されており（『看聞日記』嘉吉元年六月二六日条（『看聞御記 下』六三一頁）、『建内記』嘉吉元年六月二九日条（『建内記三』二五二頁）など）、多方面にわたる人々が義教の勘気を被って蟄居させられていた様子が知られる。
- (95) 足利義持との関係では、応永三十四年九月の赤松義則死去直後にその守護管国の一つ美作国を赤松貞村に宛行ったこと（『満済准后日記』応永三十四年一〇月二七日条）に明瞭であるし、義教との関係では、貞村の女が義教の側室であったことなど高坂好『赤松円心・満祐』（二〇一頁）に指摘がある。ちなみに、貞村の文芸活動についていえば、永享五年二月一日に行われた「聖廟一万句御法楽」において「霞」という題で一句詠んでいる（『看聞日記 四』一四六頁、『師郷記 二』一六頁）。
- (96) 『建内記三』二七二頁。
- (97) 『建内記三』二七六頁。

(98) 『建内記 四』九一頁。

(99) 義教と貞村との緊密な関係についての俗説としては「嘉吉記」の以下の記事がよく知られている。「翌正長元年正月十八日(足利義持が)薨逝シタマフ。翌永享元年義教將軍ニ任ジ、天下ノ諸大名、我モ我モト上洛シ賀シ奉ル。赤松入道性具(満祐)モ上洛シ、弥奉公ノ勞ヲ勤ム。一門ノ内コレニ過タル器量ノ人ナケレバ、備前・播磨・美作ヲ性具父子ニ被下ケル。其後、赤松伊豆守貞村、男色ノ寵比類ナシ。イカニモシテコレヲ取立ント思召被仰ケルハ、兄ノ御所赤松家ノ嫡々ニ不被仰付、詮則(満則カ)ガ七番目ノ末子(貞村カ)ニ御目ヲカケラレ候事ソノ謂ナシ」。「嘉吉記」《群書類従二〇輯》、三一八頁)。

(100) 嘉吉三年六月一五日には貞村は浄花院において足利義教のための仏事の結願を迎えているし『建内記 六』八〇頁、同年九月には山名勢と市原野郷民とのこぜりあい之際して姿を見せている(『看聞御記 下』六九六頁)。なお『朝日 日本歴史人物事典』(朝日新聞社、一九九四年二月)所収の「赤松貞村」項(榎原雅治氏執筆)によれば、「赤松諸家大系図」によると、貞村の没年は文安四年(一四四七)となっているという。

(101) 「建内記」嘉吉元年九月一二日条に、播磨木山城陥落と赤松満祐の自殺について「後聞」として書き止めているが、「足利將軍御内書并奉書留」に収める(嘉吉元年)九月二日細川持之書状に「抑赤松大膳大夫人道(満祐)事、去十日於播州城山城討捕候」とあることによって、赤松満祐の死去は嘉吉元年九月一〇日であることが知られる。

(102) 『師郷記』嘉吉元年九月一〇日条に、「十日、後聞、今日播州赤松城^{城山}被攻破、赤松入道(満祐)自害、於彼頸者、山名兵部少輔^{守伯善}(教之)手者取之」とみえ、山名氏の赤松追討における力の入れ方がわかる。

(103) この分郡守護職に関しては、依藤保「花押掲載の必要性について―二人の赤松満政―」〔鹿児〕一二六・一二七号合併号、一九八六年二月）にふれるところがある。

(104) 『建内記 四』七二頁。太田順三『嘉吉の乱』と山名持豊の播磨進駐―『室町幕府―守護体制』のモノクローム〕〔民衆史研究〕九、一九七一年五月）参照。

(105) 増補続史料大成『斎藤基恒日記』五五～五六頁。

(106) 赤松満政に与えられたこの三ヶ郡の職務は、「建内記」嘉吉元年一〇月一三日条の表現を借りると「御料所御代官職」であった（『建内記 四』一七三頁）。

(107) 播磨国美囊地区に所在する「法光寺文書」に収める嘉吉元年一月七日赤松満政寺領安堵状（『兵庫県史 史料編 中世二』一二二頁、および「東大寺文書」に収める嘉吉元一二月二九日播磨分郡守護赤松満政書下（大日本古文書『東大寺文書十八』一二二～一二三頁）。ちなみに、『兵庫県史 史料編 中世二』所収「法恩寺文書」一二月二八日赤松満政寺領安堵状（高坂好『赤松円心・満祐』二五八頁に写真あり）の発給者満政は、本稿で扱う満政ではなく、赤松則房の別名である。注（108）所掲の依藤保論文参照。

(108) 『看聞御記 下』六六一頁、六九六頁。

(109) 『建内記 六』二〇九頁、『斎藤基恒日記』六一頁。

(110) 『斎藤基恒日記』六二頁、「東寺執行日記 六」嘉吉四年一〇～十一月。

(111) 文安元年二月二日室町幕府御教書（大日本古文書『益田家文書一』一二二頁）、文安元年二月二七日山名持豊感状（同『毛利家文書一』七三頁）など。

(112) 「東寺執行日記 七」同日条。

(113) 『師郷記 四』文安二年二月一四日条（同書、八頁）。

(114) 『師郷記 四』文安二年四月四日条（同書、一六頁）。赤松満政の最期については、辰田芳雄『嘉吉記』にみられる文安の乱―赤松満政の播磨合戦―」（『季刊ぐんしょ』二六、一九九四年一〇月）参照。